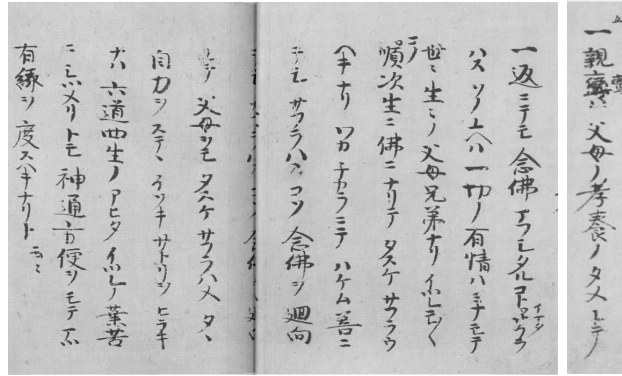


副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅲ期・第8回（通算第28回）

第五章——ただ念仏と回向（3）

加来 雄之



『歎異抄』第五章（蓮如本・加来試訳）

『歎異抄』第五章	加来試訳（安良岡訳を参照）
一五 ①親^{*1}鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念佛まふしたること^{*2}いまださふらはず。 ②そのゆへは、一切の有情はみなもて世に生にの父母兄弟なり。 ③いづれも／＼^{*3}この順次生に佛になりてたすけさふらうべきなり。 ④わがちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を廻向して父母をもたすけさふらはめ。 ⑤たゞ自力をすてゝ、いそぎ^{*4}さとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦しづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり。と〔云ふ〕。	第五章 【(1) 主題】 ①「〔私、〕親鸞は、父母の<u>追善供養</u>のために〔なるのだと考えて〕、一返であつても念仏を申したことは、まだございません。 【(2) 理由】 ②その理由は、すべての情けあるものたちはみなすべてが、次々の世に生まれ変わり、死に変わる父母であり、兄弟なのである。 ③どなたもどなたも、この生の次の生で、仏になって、助けることができるのです。 ④わが力ではげむ善行でもございますならば、念仏を廻らし向けて、〔亡き〕父母をもお助けしましょうけれど、 ⑤ただ〔ひたすら〕自力を捨てて、いそいでさとりをひらいてしまえば、六道や四生〔という迷いの世界に流転する〕中において、どのような〔前世の〕業〔の報い〕による苦しみに沈んでいたとしても、神通力やさまざまな手だてによって、まず〔第一に〕縁あるものを度すことができるのです。」 ⑥と〔故親鸞聖人は〕教えてくださいました。

【校訂】

- *1 「鸞」を書きかけ鳥を山となずり訂記、さらに右に「鸞」と訂す
- *2 右行間に「いまだ」三字を補記
- *3 右行間に「この」二字を補記。
- *4 「さとり」——（永）「浄土のさとり」

=====

はじめに

- ・これまでの復習——利他について
- ・第五章で学びたい視点——まよいの世界にかかわる
利他の対象の展開
父母 → 一切有情 → 有縁
利他の内容の展開
孝養 → たすけそうろうべきなり → 度すべきなり
- ・『歎異抄』第五章における「回向」と親鸞思想——「不回向」の行としての念仏

=====

④ わがちからにてはげむ善にてもさふらはゞこそ、念佛を廻向して父母をもたすけ
さふらはめ。

④わが力ではげむ善行でもございますならば、念仏を廻らし向けて、〔亡き〕父母をも
お助けしましょうけれど、

・「わがちからにてはげる善」は「自力」をあらわす。つまり、「父母の孝養のため」に
「念仏まふ」すことが、「念仏を回向して父母をもたすけ」ようという「わが力をはげ」む立
場として確かめられ、この立場が次の⑤の冒頭では、「ただ自力をすてて」と「ただ」「すて」
るべき「自力」の立場とされる。

・「たすけさふらはめ」（「助けましょうけれども」の意。「こそ…め」の形は、いわゆる強
調逆説法で、下へ続く文法である。」（安良岡）——「たすけさふらはめ」から「たすけさふ
らうべきなり」へ。

・このような「わが力をはげむ善」として「念仏まふす」という立場は、第二章において
「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という「よきひとのおほせ」として示され、
第四章で「念仏まふすのみぞすえとをりたる大慈悲心にてさふらうべき」と確かめられた「た
だ念仏」という本願他力の立場に対する誤解である。

なぜ「わがちからにてはげむ善」が批判されなければならないのか。

- ・聖覚『唯信鈔』——「父母孝養」などの諸行（自力性）はなにが問題なのか。

諸行往生というは、あるいは父母に孝養し、あるいは師長に奉事し、あるいは五
戒・八戒をたもち、あるいは布施・忍辱を行じ、乃至三密・一乗の行をめぐらし
て、浄土に往生せんとねがうなり。これみな往生をとげざるにあらず。一切の行

は、みなこれ浄土の行なるがゆえに。ただこれは、みずからの行をはげみて往生をねがうがゆえに、自力の往生となづく。行業、もしおろそかならば、往生とげがたし。かの阿弥陀仏の本願にあらず。摂取の光明のてらさざるところなり。

(『唯信鈔』『聖典』(第2版) 1094 頁)

この自力性への批判精神への頷きが『歎異抄』の思想の核心であり、第五章がどのように念仏の利他性をあきらかにしようとしているかについての重要な視座である。その自力性の問題に気づかせるとき、念仏が他者への善として利用される身近なしかも切実な問題としての「父母の孝養」が縁とされたのであろう。もしくは「父母の孝養」を縁としてこの念仏の利他のありかたが展開されたのであろう。

・「念仏を回向して」の「回向」について。「回向」はインドの言葉でパリナーマであるが、親鸞の思想におけるもっとも重要な概念である¹。にもかかわらず『歎異抄』ではただ一回、この第五章に自力の行としてしか出てこない。このことはすでに述べてきたように『歎異抄』が源空聖人の『選択本願念仏集』の教義のもとにあること、ここでは「不回向」という思想を受けていることをあらわしている。——不回向は無回向ではない。

念仏が回向の行ではないことについて、善導の『観無量寿経疏』散善義に次のようにある。

若し後の雑行を行ずるは、即ち心、常に間断す。回向して生を得べしと雖も、衆て「疎雑の行」と名づくるなり。故に「深心」(観経)と名づくと。

(「化身土巻」『聖典』(第2版) 392 頁)

また『西方指南抄』上末には次のようにある。

次に廻向不廻向対は、正行は廻向をもちいざれども、自然に往生の業となる。すなわち疏の第一に云く、「今『観経』の中に、十声称仏すれば即ち十願・十行有りて具足す、云何ぞ具足、南無と言うは、即是帰命なり、亦是れ発願廻向の義なり。阿弥陀仏と言うは即是れ其の行なり、斯の義を以ての故に必ず往生を得」。不廻向という。雑行はかならず廻向をもちいるとき往生の業となる、廻向せざれば往生の業とならず、かるがゆえに、文に「廻向して生を得べしと雖も」と云える、

(『西方指南抄』上末(『浄典全三』923 頁))

・法然の不回向と親鸞の如来(本願力)回向——法然は自力の回向を否定した。しかし回向がないのではない。親鸞の回向は、他力(如来の本願力)回向である。周知のとおり、親鸞は第十八願成就文の「至心廻向」を「至心に回向して」と読まずに「至心に回向したまえり」と訓読した。

¹ 「凡そ回向の名義を釈せば、謂わく、己が所集の一切の功德を以て、一切衆生に施与したまいて、共に仏道に向かえしめたまうなり」と。(証卷引用、『浄土論註』、『聖典』(第2版) 270 頁)

・ちなみに親鸞に念仏によって善を他に回向するという思想がないわけではない、しかしそれは自力回向ではなく、他力によってのみ成り立つことが強調される。

南無阿弥陀仏をとけるには 衆善海水のごとくなり
かの清浄の善身にえたり ひとしく衆生に回向せん

(『高僧和讃』曇鸞和尚、『聖典』(第2版) 607 頁)

如来の回向に帰入して 願作仏心をうるひとは
自力の回向をすてはてて 利益有情はきはもなし

(『正像末和讃』、『聖典』(第2版) 612 頁)

⑤ たゞ自力をすてゝ、いそぎ*4さとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり。

⑤ただ〔ひたすら〕自力を捨てて、いそいでさとりをひらいてしまえば、六道や四生〔という迷いの世界に流転する〕中において、どのような〔前世の〕業〔の報い〕による苦しみに沈んでいたとしても、神通力やさまざまな手だてによって、まず第一に縁あるものを度することができるのです

・「ただ自力をすてて」。この「ただ」という表現が、第八章では次のように表現される。

念仏は行者のために、非行非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば、非善といふ。ひとへに他力にして、自力をはなれたるゆへに、行者のためには非行非善なりと云々

(『歎異抄』第八章、『聖典』(第2版) 770 頁)

このように「ただ自力をすてて」とは、念仏をわが行・わが善としないということである。

・「ただ自力をすてて」は他力に帰することを意味する。他力と自力とは両立しない。他力は真実であり、自力は虚妄分別である。しかし、それは自力がなくなるわけではなく、自力の「非」であることを自覚する。

・また「ただ自力をすてる」「自力をはなれたる」ということは、努力をしないという意味ではない、努力によって価値を高めて仏になるという立場をすてることである。人生を与えられたただ一回のものとして仏の智慧に照らされて精一杯生きていくことが他力である。みずからの知力や能力によって仏になるのではなく、大悲の名号に目覚めてブツダになるという身の依りどころの転換が自力をすてるということであろう。

「いそぎさとりをひらきなば」

・蓮如本の「いそぎさとりをひらきなば」と永正本の「いそぎ浄土のさとりをひらきなば」との異なり。

・「いそぎ」は第四章でも押さえたように、如来－内－悪人、「悪人成仏のため」の「他力をたのみたてまつる悪人」の自覚をあらわす時の表現である。親鸞の著述では「りょうし・あき人などは、いし・かわら・つぶてなんど」「かならず大涅槃のさとりをひらく」という表現にあたるのではないだろうか。

永正本のように「浄土のさとり」とあれば、順次生のさとりのために今生に「かならず仏となる証しをえる」ことが課題となる。浄土と聖道のさとりが対比されて、浄土のさとりの独自性がはっきりとなるのだが、蓮如本では「浄土の」がないことをどのように考えるか。第四章でも「いそぎ仏になりて」とあることに対応すれば「いそぎさとりをひらきなば」という表現でよいと思う。

「いそぎさとりをひらきなば」は、単に浄土往生教ではなく大乘仏教の究竟の大涅槃の境地にいたることを示している。

「超」は、こえてという。生死の大海を、**やすくよこさまにこえて、無上大涅槃のさとりをひらく**なり。信心を浄土宗の正意としるべきなり。

(『尊号真像銘文』、『聖典』(第2版) 652 頁)

如来の御ちかいを、ふたごころなく信樂すれば、摂取のひかりのなかにおさめとられまいらせて、かならず大涅槃のさとりをひらかしめたまうは、すなわち、りょうし・あき人などは、いし・かわら・つぶてなんどを、よくこがねとなさしめんがごとしと、たとえたまえるなり。

(『唯信鈔文意』、『聖典』(第2版) 678 頁)

「如」は、ごとしという。ごとしというは、他力信樂のひとは、このよのうちにて、不退のくらいにのぼりて、かならず大般涅槃のさとりをひらかんこと、「弥勒のごとし」となり。

(『一念多念文意』、『聖典』(第2版) 656 頁)

・永正本の「いそぎ浄土のさとりをひらきなば」という表現については、隆寛の次の表現が参考になると思う。

この念仏もまたしかなり。諸教にきらわれ、諸仏にすてらるる悪人・女人、すみやかに浄土に往生して、まよいをひるがえし、さとりをひらくは、いわば、まことにこれこそ諸教にすぐれたりともいいつべけれ。

(隆寛『後世物語聞書』、『聖典』(第2版) 1114 頁)

されば、つみのきゆることも南無阿弥陀仏の願力なり。めでたきくらいをうることも南無阿弥陀仏の弘誓のちからなり。ながくとおく三界をいでんことも阿弥陀仏の本願のちからなり。極楽へまいりて、のりをきき、さとりをひらき、やがて仏にならんずるこ

とも、阿弥陀仏の御ちからなりければ、ひとあゆみもわがちからにて極楽へまいることなしとおもいて、余行をまじえずして、一向に念仏するを他力の行とはもうすなり。

(隆寛『自力他力事』、『聖典』(第2版) 1126 頁)

＊ちなみに古語における「やがて」は「そのまま、引き続いて。すぐに、ただちに。すなわち」の意。

「六道四生のあいだ、いずれの業苦にしずめりとも、」

・「六道四生のあいだ、いずれの業苦にしずめりとも」とある。「六道」は、地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の六つの迷いの境界であり、「四生」は、胎生・卵生・湿生・化生は迷いの生き物の出生の形態によって四種に分類したものであり、ともに流転輪回するあり方を示す。「あいだ」は、その迷いの領域のなかにあることを示し、「いずれの業苦にしずめりとも」は、その領域のなかでどのような悪業の報いによる苦しみに落ち込んでいたとしてもという意味であろう。

では「いずれの業苦にしずめり」の主語は誰であろうか、「一切の有情」であろうか、それとも「いそぎさとりをひら」いた存在であろうか。先人には二通りの理解がある。例えば、金子大榮は、救われるべき対象である「一切の有情」であるとし、安良岡康作は一切の有情を救うべき「さとりをひら」いた存在であるとする。これらの理解は、次の「神通方便をもてまづ有縁を度すべき」存在との繋がりをどのように理解するかによるのであろう。

「神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり」

・「神通」は私たち凡夫には量り知ることのできない不思議なはたらきである。まず思いだされるのは、『大無量寿経』の四十八願において国中人天の徳として誓われる第五願より第十願(宿命通・天眼通・天耳通・他心通・神足通・漏尽通)の六つの神通である。とくにその中の天眼通、宿命通・漏尽通)を三明という。またここでの「方便」とは、仏菩薩が迷いの衆生を真実の世界に近づけるためのたくみな手だてとしての善巧方便のことであろう。仏になったうえでの衆生に対する無碍自在な救済力をあらわす。『浄土論』では、このはたらきが菩薩の第五功德「園林遊戯地門」と表現されており、親鸞は『入出二門偈』において菩薩の出第五門を次のように讃嘆している。

第五に出の功德を成就したまう。菩薩の出第五門というは、云何回向したまう。心に作願したまいき。苦悩の一切衆生を捨てたまわざれば、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるが故に、功德を施したまう。彼の土に生じ已りて速疾に奢摩他・毘婆舍那・巧方便力成就を得已りて、生死園・煩惱林に入りて、応化身を示し、神通に遊びて、教化地に至りて群生を利したまう。即ち是れを出第五門と名づく。園林遊戯地門に入るなり。

(『入出二門偈』、『聖典』(第2版) 547－548 頁)

・また、「正信念仏偈」の「煩惱の林に遊んで神通を現じ、生死の園に入りて応化を示す」

の文に照らせば、「六道・四生のあいだ」が「煩惱の林、生死の園に入りて」に当たり、「まず有縁を度すべきなり」が「応化を示す」に当たるのであろう。

・このように考えれば、『歎異抄』第五章には、還相の回向という言葉は出ないが、その思想は出ていることになる。

・出第五門によれば、「神通方便をもってまず有縁を度すべき」のは、「いそぎさとりをひら」いた存在である。では凡夫である私たちと「いそぎさとりをひら」いた存在とはどのような関係なのであろうか。

・「浄土のさとりをひらいて」、「生死に回入し」、神通方便によって有縁を度すことを、「業苦に沈む」と表現するだろうか。そのように考えると、金子の意見のように「業苦に沈」んでいるのは衆生であると受けとる方が適切な気がする。

・「まず有縁を度すべきなり」

「孝養父母」→「一切の有情……たすけさふらうべきなり」→「まず有縁を度すべきなり」と他者へ向かう表現が展開していることに注目したい。この「有縁を度す」という表現は、曇鸞の『讃阿弥陀仏偈』による表現であろう²。また親鸞の『讃阿弥陀仏偈和讃』には『讃阿弥陀仏偈』にもとづいて「有縁」が二度出される。

(17) 観音勢至もろともに 慈光世界を照曜し

有縁を度して〈えんあるをわたす〉しばらくも 休息あることなかりけり

(48) 仏恵功德をほめしめて 十方の有縁にきかしめん

信心すでにえんひとは つねに仏恩報ずべし

² 「有縁を度す」という表現は、曇鸞の『讃阿弥陀仏偈』に、観音勢至のはたらきとして、「又観世音・大勢至於諸聖衆最第一 慈光照曜大千界 侍佛左右顕神儀 度諸有縁不暫息 如大海潮不失時 如是大悲・大勢至一心稽首頭面礼」という偈文にもとづく、また『讃阿弥陀仏偈』では「有縁」という表現がもう一度、衆生の仏道の課題として「我讃佛恵功德音 願聞十方諸有縁 欲得往生安樂者 普皆如意無障導 所有功德若多少 廻施一切共往生 南無不可思議光 一心歸命稽首来」（『讃阿弥陀仏偈』）と出る。

「有縁」は『観経』にもとづく用語。「次に復た、応に大勢至菩薩を觀ずべし。此の菩薩の身量・大小、亦観世音の如し。円光の面各おの百二十五由旬なり。二百五十由旬を照らす。挙身の光明、十方国を照らす。紫金色を作す。有縁の衆生、皆悉く見ることを得。」（第十一勢至觀、『聖典』（第2版）118頁）

また『愚禿鈔』には『観無量寿経疏』の表現によって四有縁が問題とされる。

「四有縁は、

一には「汝、何を以て乃し將に有縁の要行に非ざるをもって我を障惑する」と。

二には「然るに我が所愛は即ち是れ我が有縁の行なり。即ち汝が所求に非ず」と。

三には「汝が所愛は即ち是れ汝が有縁の行なり。

亦我が所求に非ず。是の故に各おの所樂に隨いて其の行を修すれば、必ず疾く解脱を得るなり。」

四には「若し行を学ばんと欲わば、必ず有縁の法に藉れ。少しき功勞を用うるに、多く益を得るなり。」

文」

（『愚禿鈔』下『聖典』（第2版）532－522頁）

(『讃阿弥陀仏偈和讃』、『聖典』(第2版) 572-573・577 頁)

このように『讃阿弥陀仏偈』にもとづき、親鸞は『讃阿弥陀仏偈和讃』にも二度、「有縁」という言葉をもちいている。

また『皇太子聖徳奉讃』にも、

長者卑賤〈いやしきものとなり〉の身となりて 経論・仏像興隆し

比丘・比丘尼とむまれても 有縁の有情を救済〈たすけすくわんとなり〉せむ

(『皇太子聖徳奉讃』『浄典全二』545 頁))

・この⑤では、これまでの「たすける」という表現が、「度す」というより厳密な仏教のすくいを表す用語にかえられていることに注目したい。

・この和讃の精神を窺うと、⑤の主語の分かりにくい表現は、むしろ如来のはたらきによる利他教化(「有縁を度して」)と衆生の念仏としての利他(「有縁にきかしめん」)という、切り離すことのできない利他という事実の二重の意味を含蓄させるためなのかもしれない。

・ただ念仏もうすという事実による利他は、私が意識する特定の他者を目当てにするというよりも、私がふれた世界を縁として、その世界がおのずから他者を教化していく。その事実を「まず有縁を度すべきなり」と表現するのであろうか。

もちろん私たちが、この人は有縁であるとか、あの人は無縁であるなどと判定することはできない。それでも有縁という言葉にはどこか私たちの情に近いものが感じられる。私たちが愛着をもつ人がかならずしも有縁であるかどうかは分からないが、私のおもいはからいをこえて有縁のものから自分のふれた世界にともに出会っていくであろうというところに立つ。——「天命に安んじて人事を尽くす」といわれた清沢先生のころがわかるのではないか。

大悲は無縁であるけれども、というより大悲は無縁であるからこそ有縁は誰でもその世界に目覚めていく。

⑥ と [云々]

と〔故親鸞聖人は〕教えてくださいました。

結び

=====

【参考】

(1) 法然の教えとの影響関係

(以下の法然の法語には、『歎異抄』第五章の言葉遣いがほとんど含まれている。しかし法然の法語は念仏による父母孝養、なき人への念仏の回向を肯定しているように見える。この法語の思想と親鸞の第五章の思想とはどのような関係にあるのだろうか。これについては次回委しく検討する。)

法然『拾遺黒谷上人語燈録』	『歎異抄』第五章
「一 <u>孝養の心をもてちちははをおもくしおもはん人は。まづ阿弥陀ほとけにあつけまいらすへし。わが身の人となりて往生をねがひ念佛する事は。ひとへにわか父母のやしなひたてたれはこそあれ。わが念佛し候功德をあはれみて。わが父母を極楽へむかへさせおはしまして。罪をも滅しましませとおもはは。かならずかならずむかへとらせおはしますんする也。</u> ……さ候へはのちの世をとふらひぬへき人候はん人も。それをたのますして。<u>われとはけみて念佛申して。いそき極楽へまいりて。五通三明をさとりて。六道四生の衆生を利益し。父母師長の生所をたつねて。心のままにむかへとらんとおもふへきにて候也。又当時日ことの御念佛をも。かつかつ廻向しまいらせられ候へし。なき人のために念佛を廻向し候へは。阿弥陀ほとけひかりをはなちて。地獄餓鬼畜生をてらし給ひ候へは。此三悪道にしつみて苦をうくる者。そのくるしみやすまりて。いのちをはりてのち。解脱すへきにて候。大經にいはいはく。若在三塗勤苦之處見此光明皆得休息無復苦惱寿終之後皆蒙解脱といへり</u> (『大正蔵』83、254-254 頁)	一 親鸞は父母の孝養のためとて一返にても念仏まふしたることいまださふらわず。 そのゆへは一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。いづれもいづれもこの順次生に仏になりてたすけさふらうべきなり。わがちからにてはげむ善にもさふらわばこそ念仏を回向して父母をもたすけさふらわめ、ただ自力をすてていそぎさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まず有縁を度すべきなり、と。[云々]

ここにわれら、このたびはじめて人界の生をうけたるにてもあらず、世世生生をへて、如来の教化にも、菩薩の弘經にも、いくそばくかあいたてまつりたりけん。ただ不信にして教化にもれきたるなるべし。三世の諸仏、十方の菩薩、おもえばみなこれむかしのともなり。釈迦も五百塵点のさき、弥陀も十劫のさきは、かたじけなく父母師弟とも、たがいになりたまひけん。

(『西方指南抄』巻下、法語(念仏大意)、『浄典全三』一〇三八頁)